

ホントのことが書いてある

永 杉 喜 輔

(群馬大学名誉教授)

吉田君の『ふつうの暮らし ふつうのホーム』が出たとき私は何度もくり返して読んだ。ホントのことが書いてあるからだ。

人とつき合うならホッネでつき合いたい。

一番ホッネでつき合うのは夫婦である。結婚するまでは自分をよく見せようと思って努力する。結婚したら、もう自分のものになったと思ってホッネが出る。そしてケンカになる。

こうして私も夫婦は五十年以上たった。私の妻は八年来、不治といわれる肝硬変で入退院をくり返している。私は出来ないながらも、その看病につとめている。妻の看病を私の生涯学習の仕上げと心得てやっている。むろん、こう

いうことを言うと妻に笑われる。しかし、私としては、いくら笑われようが、今私がしなければならぬことである。また、やりたいことである。クスリ作り方、病人食の作り方を看護婦さんに教わる。テレビで男の料理を見る。

茶わんがよごれたら洗う。私が洗った茶わんを見て「ウラがよごれている」と妻が言う。「ウラではメシは食わん」とケンカになる。そして、しまった、言うんじゃなかったと後悔する。そのなんでもない、ふつうの生活が一番たいせつである。

私どもは、とつびようしもないことで生きているのではない。なんでもない、毎日のふつうの生活で生きているのだ。病妻の気分がよければ私は嬉しい。それが生き甲斐である。生き甲斐というものが別にあるのではない。もう年をとって、あと何年、何日生きるかわからない。しかし、こうして永遠に生きる事が出来たら生きつづけたい。死ぬことはわかりきっていても、こういう毎日を生きつづけたい。

血は水よりも濃^ニい。この本の中に妄想の老母の話がある。日夜そのへんをう

ろつく。そういう時は寮母さんは、夜中でも息子に電話をさせる。母親は「帰りたいたから迎えに来てくれよ」と必死に頼む。息子は「いま夜中よ、何を寝ぼけたことを言う」と電話を切る。母親はまたうろつく。寮母さんが、その母親にジュースを飲ませるとき、「これは息子さんから送って来たのよ」と言うと、母親は目をほそめて、「あの子はとってもやさしい子よ」と自慢する。ただそれだけのことだが、そういうところを読むと私はじーんとくる。

むずかしい本でアタマをひねるより、この本のほうがアタマでなくこころにひびく。

これは誰でも読める「ふつう」の本である。この「ふつう」がふつうでなくなったとき、人間同志が「不通」になる。どぎついシゲキがないと、生き甲斐を感じないような鈍感な人間がふえたら、人類はほろびる。

老いも若きも、男も女も、この本を一度読んでほしい。一度読んだら何度も読みたくなる。ホントのことが書いてあるからだ。

任運荘の最高齢者のひとり百歳の羽田野モモエさんは、任運荘創立記念日に寄せて、「もろとも」がありがたく思うや日の本のここは楽土の任運荘かな」と詠まれました。

もちろん、私たちは今の任運荘がそのまま楽園であるとは、夢にも思っていません。しかし、ここを終の住み処と思い定めているお年よりのために、どうかして天国に一番近い郷であらしめたいと、本気で願っています。

では、そのために具体的にどんなことを日常しているか。私たちは、老人ホームの最低限度のあり方として、いつも次の六つの問いを自分自身に投げかけてきました。

一、老人ホームに果たして規則・束縛は必要か。自由意志を制限していいないか。二、おむつは時間を決めて換えてよいか。三、床ずれはあって当然か。

四、雑居部屋なのに、間仕切りカーテンをしないでよいだろうか。五、ホームに悪臭はあって仕方がないか。その何れについても、私たちは確信をもって「ノー」と答えます。六、痴呆老人の問題行動はお世話の仕方に関係なく起こるものなのか。はっきり、問題があるからと、私たちは答えましょう。おくれげせながら十三年めの昭和六十三年、この旗印を高く掲げました。二章から七章までは、その答えを実証する実践記録です。

終章の「小さき者は小さきままに」は、とくに長い記述になっています。任運荘はひたすら

自己の本分に専心しながらも、自己内に閉じこもらず、日本の福祉の現状に対し、問題意識を鋭くし、実践的に対応してきました。本章では、その切り結んだ十三年の歩みを、年を追って記録しました。（編集の都合で十四年めの平成元年からは略記にしています。）

私たちは、小は小なりに、無名の者は無名のままに、主張すべきは主張し、時に闘いを避けることはしなかった。十三年の道中、ある秀れた歌人の、「少数にて常に少数にてありしかば一つ心を保ち来にけり」の歌が、限りなく私たちを励ましてくれました。これらの小さな足跡を、日本の福祉の歴史に、野の文献として留めたい。―この願いをこめて、圧縮するようにしてまとめたのが終章です。

本書の初版は昭和六十三年、二版で終わりにしましたが、入手希望が続いていますので、ここに大々的に増補改訂して「新・ふつうの暮らし ふつうのホーム」と改題しました。（十二章までの年次は昭和六十三年までとして、増補の十三章以降は、新しい年次になっています。）十三章では、三章の随時交換の精神の合理化として、平成二年に尿とりパットと布おむつ併用への移行を記しています。十四章「49対1の世界」では、重度化するお年よりの激増にゆらぐ特別養護老人ホームの深刻な現状での任運荘の対応を報告。何れも老人ホームの今日的課題で、私たちの問題意識を明確に提示しています。

十五章は老人ホーム実務者や研究者の座談会への批判であるが、いきおい対立的になってい

るのはやむをえません。十六章は雑誌社から一般向けの特養ホーム解説を求められてまとめられたものです。

施設運営の眼目は「寮母は宝」という思想につきると信じます。そう思うとき、日夜献身的に働いてきたわが寮母さんたちに、限らない感謝と敬意の念が、沸々とこみ上げてくることを禁じ得ません。ここまで書き至るとき、ある日の会話が突然の如く、強く心に蘇りました。

東大法学部の米倉明教授と話したことです。氏が拙著『老人ホームはいま』を読まれて、任運荘に宿泊見学を希望され、来訪された折のことです。米倉氏「あなたはなぜ千葉大学をやめられたのか」。それは、私が若き日千葉青年師範に勤めていたが、千葉大学になったので、そこをやめたことを指します。私「青年教育のために師範学校に勤めたのであって、大学の学者になる気はなかったのです。なぜって、学者になるには、外国語に堪能か、和辻哲郎ぐらの才能がなければよしたがいと思っていたから、学校をやめるのに全く未練はなかった」。米倉氏「和辻さんでも書けない本を、こうして書いたではないか」。たとえ、外交辞令でも、あの本をそういって下さる氏の志に、私は深く感動しました。それは、とりもなおさず、わが任運荘の寮母たちの働きが真実評価されていることになるからです。

永杉先生から冒頭のご推薦文を頂きました。文とはこういうもの、その見本のような名文で、拙著を飾ることができ、最高に幸せです。

終わりに、まず、三和印刷・田北社長の犠牲的出版に対し、厚くお礼を申しあげます。氏はご夫妻だけの小さなガリ版業から、ついに今日のトップ企業に至っています。この度の出版に、その社会還元の意味をこめたいと洩らされました。つぎに、表紙を故三橋節子氏の名画「田鶴来」で飾ることができたのは、所蔵されている滋賀県立近代美術館と御両親三橋時雄御夫妻のご好意によるもので、感謝にたえません（二三二頁参照）。各章のカットは新進作家渡辺恭英氏から頂きました。こうして、多くの温かいお心に包まれた拙著の幸運を、ただただありがたいと感謝いたします。

平成四年七月

吉 田 嗣 義